

【論文】

『サンクチュアリ』における「法」と共同体

永尾 悟

“Law” and Community in *Sanctuary*

Satoru NAGAO

要旨

In his revision of *Sanctuary*, William Faulkner added the scene of the lynching of Lee Goodwin, who is wrongly accused of the murder and the rape that Popeye has committed. The scene clearly shows the novel's shift in emphasis away from Horace Benbow's inner conflicts to the realities of a community in the early twentieth-century American South that are exhibited through the rape and the lynching. This thesis, focusing on the rape, the trial and the lynching, argues that traditional gender codes in Yoknapatawpha County lead to the dysfunction of the justice system and are inextricably associated with vigilantism. Both the male audience in the county's courthouse and the lynching mob outside of it attempt to protect their communal value of "sacred" "womanhood" through their insistence on protecting the rape victim, Temple Drake. The rape case in *Sanctuary*, therefore, illuminates the structure of male dominance over female sexuality and exposes the blurring of the boundaries between legality and illegality.

キーワード：ウィリアム・フォークナー、『サンクチュアリ』、ジェンダー

はじめに—『サンクチュアリ』の改稿と加筆された場面

ウィリアム・フォークナーの『サンクチュアリ』（1931）の第29章では、無実の罪で有罪判決を受けたリー・グッドウィンが刑務所の外で焼き殺されるという場面が描かれている。ポパイが temple・ドレイクを玉蜀黍の穂軸を使ってレイプした事件に関して、ヨクナパトウファ郡庁舎前の広場に集う群衆は、暴行犯だと誤解されたグッドウィンに対して残忍な制裁行為を行うのである。法の機能不全と共同体の行き過ぎた自警主義を示すこの場面は、オリジナル版を改稿する過程でフォークナーが加筆したものである。オリジナル版は、ホレス・ベンボウの「無意識の投影」だというノエル・ポーク（Noel Polk）の指摘にもあるように（46）、主にホレスの内的視点を通して物語が展開されている。これに対して、レイプの制裁としてのリンチが加筆された改訂版は、ホレスがグッドウィンの弁護を通して外的現実に対峙する過程がより客観的視点から描写されており、templの事件をめぐる共同体の言説を内包する作品になっている。

しかし、『サンクチュアリ』の先行研究においては、「無意識の投影」としてのオリジナル版の痕跡

を改訂版の中にも見ようとするためか、ホレスのエディプスの葛藤をめぐる解釈がさかんに実践されてきた。たとえば、ジョン・T・アーウィン (John T. Irwin) やジョン・T・マシューズ (John T. Matthews) の論文は、テンブルの事件がホレスに与える心理的影響についてフロイト的精神分析を試みた代表的なものである。確かに、ふたつの『サンクチュアリ』の深い間テクスト性や『響きと怒り』(1929) との部分的共通性を考えれば、このような読みの必然性はある。しかし、改稿による変更点を踏まえれば、議論の視点を共同体内の相克に向け直すことも必要だろう。そこで本稿では、テンブルの事件が、ヨクナパトーフア郡ジェファソンの法廷とその外側で解釈されていく過程を分析しながら、共同体のジェンダー規範が法とかかわりながら生み出す緊張関係について論じていく。

I. 禁酒法下の「廃れた」大農園屋敷—テンブルとポパイ

テンブルの事件が起こるのは、ジェファソンから少し離れた杉林の中にある「オールド・フレンチマン」という名の大農園屋敷である。「南北戦争前に建てられた」この屋敷は、大農園文化の「聖域」である「綿畑」と「庭園」と「芝生」に囲まれていたが、これらはすでに「ジャングル」と化しており、ギャングたちの酒の密造の拠点になっている。「聖域」が「廃れた」南部では、南北戦争以前のように綿を中心とした大農園経済は機能しておらず、違法な酒の密造が横行している。

The house was a gutted ruin rising gaunt and stark out of a grove of unpruned cedar trees. It was a landmark, known as the Old Frenchman place, built before the Civil War; a plantation house set in the middle of a tract of land; of cotton fields and gardens and lawns long since gone back to jungle, which the people of the neighborhood had been pulling down piecemeal for firewood for fifty years or digging with secret and sporadic optimism for the gold which the builder was reputed to have buried somewhere about the place when Grant came through the county on his Vicksburg campaign. (8)

この荒れ果てた外観が示すように、屋敷の住人たちは安定した家族関係を形成してはなない。旧南部における大農園屋敷は、白人家族と彼らに仕える黒人奴隷が住むことが典型だが、オールド・フレンチマン屋敷の人々はすべて白人であり、家父長を中心とした家族関係を築いておらず、いわゆる南部貴族的な優雅さとは程遠い生活を送っている。酒の密造人リー・グッドウインは、メンフィスで娼婦として働いていたルビー・ラマーと内縁関係にあり、その間に生まれた赤ん坊は生気がなく、グッドウインの父親らしい老人パップは、目と耳が不自由で、杖を片手に歩き、ひとりでは食事もできないほど衰弱している。そして、法の外側で家族関係を形成する彼らとともにこの屋敷に住むのは、酒の密造に携わるポパイ、トミー、ヴァンというアウトローな白人男性である。このように、大農園屋敷に人種的要素が切り離されているという設定は、『サンクチュアリ』における白人内部の葛藤を示唆するものである。

オールド・フレンチマン屋敷は「廃れた (ruined)」という言葉と結び付けられているが (41) (121)、この屋敷で起こるレイプ事件後のテンブル・ドレイクに対しても同じ言葉が使われている (288)。よって、「廃れた」屋敷の象徴性は、テンブルの人物像を考える上で重要な手掛かりを与えてくれる。上流階級の娘である彼女は、親元を離れて大学に通い、短いスカートをはいて男性たちとダ

ンス・パーティに出かけるという自由を満喫しており、「フラッパー」的な価値観を持つようである。また、彼女の名前がジェファソン駅のトイレに落書きされ(34)、町の若者たちが彼女の下着についての噂話をするように(30-31)、テンブルは、「娼婦」的なイメージとして周囲の男性に共有される欲望の対象になっている。しかし、上流階級意識を持つ彼女は、「私のお父さんは判事なのよ」という言葉で彼らの欲望から逃れ、屋敷に同行する男友達ガワン・ステーブンスに対しても「紳士的」振る舞いを求めようとする。しかし、「娼婦性」と「淑女性」の境界線を浮遊するこのあいまいさは、父親の権威が及ばないオールド・フレンチマン屋敷では通用しない。彼女の日常性を屋敷にも持ち込もうとするテンブルに対して、ポパイは「娼婦 (whore)」と呼び、ルビーは「娼婦」的な生き方の美学を語り、他のギャングたちは彼女に欲望の視線を向ける。この視線から逃れようとするテンブルは、屋敷の畜舎でポパイの残忍な性暴力を受けた後、メンフィスの売春宿に連れられ、ポパイによってレッドとの性行為を強要されるのであり、彼女の身体とセクシュアリティは完全に他者の支配下に置かれる。ジョン・N・デュヴァル (John N. Duvall) が指摘するように、「『サンクチュアリ』は男性／女性の結びつきがレイプと娼婦性というかたちの上に成り立って」(60) いるが、この関係性はオールド・フレンチマン屋敷という空間において顕在化するものである。

テンブルを「娼婦」と呼ぶポパイは、オールド・フレンチマン屋敷を「黒くて何とも言えない脅威となって包み込んでいる」(121) 存在として描かれている。この語句が暗示するように、ポパイの存在は、周囲の人間たちに底知れぬ恐怖を抱かせるものでありながら、その実像は謎に包まれている。ジョーゼフ・ブロットナー (Joseph Blotner) の指摘にもあるように、ポパイのモデルになったのは、ポパイ・パンフリーという実在のギャングで、酒の密造に携わり、性的不能でありながら「とても奇妙な物体を使ってひとりの女性をレイプし、彼女を売春宿に入れた」(176) 人物だろうという点は広く知られている。性的不能のレイピストというパラドックスを持つ実在のモデルに対して、フォークナーは、複数のイメージや人物設定を付与しながらさらに複雑な人物像を生み出している。「彼の顔は電光の下で見ると奇妙で血の気のない色をして」おり、「押しつぶされたブリキのようなあの邪悪な深みのなさ」(4) があるように、ポパイは非人間的で機械的なイメージを醸し出している。クリーアンス・ブルックス (Cleanth Brooks) によって、『サンクチュアリ』のテーマが「邪悪さの発見によって現実というものの本質を発見すること」(116) だと指摘されて以降、ポパイという存在も人間の心や社会に潜む「邪悪さ」という普遍的意味合いから論じられてきた。しかし、機械的なイメージを持つ彼が屋敷を覆う黒い影になっているという点を考えると、ソンドラ・ガットマン (Sondra Guttman) などの指摘にもあるように、ポパイの「邪悪さ」が南部の農本主義を脅かす産業化の流れだという解釈も成り立つ(26)。

このように、オールド・フレンチマン屋敷におけるテンブルとポパイという人物の存在を南部文化的な視点でとらえるなら、ポパイによるテンブルのレイプは、大農園文化・経済体系が産業化や近代化の流れに侵食されていくことのメタファーだと考えることができる。確かに、ダイアン・ロバーツ (Diane Roberts) が指摘するように、初期のフォークナー作品には「旧南部的な淑女性」にかかわるものが多く、キャディ・コンプソンをはじめとする女性登場人物の身体が旧南部的価値観の理想化された象徴として描かれている(125-26)。女性の身体イコール旧南部というこの図式がテンブルにも当てはまるとすれば、『サンクチュアリ』は、ジェンダーをめぐるテキストを通して近代化へ向かう南部の歴史的瞬間を映し出すものだと言えるだろう。

以上のような人物分析を踏まえて、templがポパイから襲われる場面について分析してみたい。「templのレイプ自体が『サンクチュアリ』の中心的な省略部分である」(260)とマシューズが指摘するように、この行為は、具体的かつ直接的な描写がないことで、テキストにおける主要な空白を生み出している。綿の実の殻と玉蜀黍の穂軸が散乱した畜舎の中で、templは、トミーが射殺されるときのかすかな銃声を聞き、ポパイが近づくときに「私に何かが起こるのよ」(102)と叫ぶ。

To Temple, sitting in the cottonseed-hulls and the corncobs, the sound was no louder than the striking of a match : a short, minor sound shutting down upon the scene, the instant, with a profound finality, completely isolating it, and she sat there, her legs straight before her, her hands limp and palm-up on her lap, looking at Popeye's tight back and the ridges of his coat across the shoulders as he leaned out the door, the pistol behind him, against his flank, wisping thinly along his leg.... She could hear silence in a thick rustling as he moved toward her through it, thrusting it aside, and she began to say Something is going to happen to me. (102)

「私に何かが起こるのよ (Something is going to happen to me)」は、『八月の光』(1932)のジョー・クリスマスがジョアナ・バーデン殺害前に使う言葉であるが、ここでは「何か」という曖昧な表現によって、レイプという行為がはらむ意味の多義性が生じている。デボラ・バーカー (Deborah Barker) が指摘するように、玉蜀黍の穂軸は「密造ウイスキーの主原料の廃棄物」であり、大農園経済の象徴である綿の実の殻の中でtemplの肉体が侵略されることは象徴的である (150)。

Just as the white moonshiners have taken over and destroyed the former plantation house, it is equally symbolic that Temple's scene of degradation occurs at the hands of the white bootlegger/gangster in a corncrib and with a corncob—the abject remains of the main ingredient in moonshine whiskey. (Barker 150)

バーカーの指摘を発展させて考えると、玉蜀黍の穂軸に屈したtemplがリーバ・リヴァーズの売春宿に連れられる過程は、オールド・フレンチマン屋敷からメンフィスを結ぶ密造酒の輸送ルートと象徴的に重なるものである。つまり、密造酒が商品として出荷されていくように、templは、性を商品化するメンフィスの売春宿に連れられた後、レッドとの関係を通して性的な快樂に目覚めるのである。これに対して、ヨクナパトーフアの法廷は、崩壊した彼女の「淑女性」を回復させる空間として機能している。

II. 事件をめぐる共同体の解釈—法廷という「善良な男性」の「聖域」

オールド・フレンチマン屋敷の畜舎で起きた事件で逮捕され、裁判にかけられるのは、真犯人ポパイではなく、通報をしたリー・グッドウィンである。グッドウィンの弁護を務めるホレス・ベンボウは、郡庁舎に集まる人々と空席になった裁判官の席を目にする。法権威の欠如を暗示しているこの場面は、強い存在感を示す聴衆の多様性を後ろ姿としてとらえている。

The bell was already ringing when Horace crossed the square toward the courthouse. Already the square was filled with wagons and cars, and the overalls and khaki thronged slowly beneath the gothic entrance of the building. Overhead the clock was striking nine as he mounted the stairs.

The broad double doors at the head of the cramped stair were open. From beyond them came a steady preliminary stir of people settling themselves. Above the seat-backs Horace could see their heads——bald heads, gray heads, shaggy heads and heads trimmed to recent feather-edge above sun-baked necks, oiled heads above urban collars and here and there a sunbonnet or a flowered hat.... The Bench was empty. (280-81)

郡庁舎に群がる「作業服やカーキ色の服を着た人々」は、葬儀屋の前でトミーの死体を好奇心で見物する人々と同じ服装をしており、法廷にいる「日焼けした襟首」の人物たちと同じく郊外の農業労働者である。そして、「都会的な襟の上にある髪油のついた頭」の人々は、ホレスが郡庁舎前広場ですれ違うような「町の住民」であることがわかる。広場の人だかりには、トミーのことを「15年もの間知り合いだった」(113) 者もいるが、彼の名字は誰ひとりとして知らない。つまり、酒の密造にかかわるギャングのトミーは、ジェファソンの人々に認知されていながらも無名の存在であるため、その死は、広場と法廷に集う同じ人々にとって好奇心の対象でしかない。

地方検事ユースタス・グレアムは、八百屋の荷物運びから成り上がった政治的野心の強い人物で、労働者が多くを占める聴衆の意識を的確にとらえている。グレアムは、彼らの内面を見透かすかのように、裁判の中心をトミー殺害からテンブルの事件にすり替えている。そして、このすり替えは、グレアム検事が証拠として提出する玉蜀黍の穂軸によって聴衆に強く印象付けられる。黒褐色の血液が付着したこの穂軸は、テンブルの被害状況を証明するとともに、町の倫理規範を揺るがす証拠として提示されている。

“You have just heard the testimony of the chemist and the gynecologist——who is, as you gentlemen know, an authority on the most sacred affairs of that most sacred thing in life: womanhood——who says that this is no longer a matter for the hangman, but for a bonfire of gasoline——” (283-84)

グレアム検事は、産婦人科医の見解を引き合いに出しながら、テンブルの事件が「この世でまさしく最も神聖な物事である女性らしさ」を侵害する行為であり、「これがもはや絞首刑どころかガソリンでの焚刑に値する」(284) と主張する。つまりグレアムは、法廷をテンブルの事件そのものよりもむしろ、この事件を通して映し出される倫理的問題を裁く場所に換えており、さらに処罰方法をめぐって一般市民によるリンチを扇動している。グレアムの主張は、ジェイ・ワトソン (Jay Watson) が述べるように、「クー・クラックス・クランの集会で発言されうる」(71) 内容のものであり、法的妥当性を備えたものではない。司法の役割とは、犯罪行為に対して正当な判決と処罰を行うことによって一般市民の先入観に基づく解釈や行き過ぎた報復行為を抑止するところにあるが、グレアムは法廷の中でその役割を軽視した発言をする。

このようにして法の機能不全に陥る法廷は、「神聖な」「女性らしさ」という価値観を共有する空間となっている。反対尋問を行うグレアムは、証人のルビーに対してグッドウィンとの婚姻関係を確認

するが、これは、「女性らしさ」の基盤となる男性との結びつきを道徳的に問うものであり、町の教会の牧師が説教で取り上げる内容である。

This morning the Baptist minister took him for a text. Not only as a murderer, but as an adulterer; a polluter of the free Democratico-Protestant atmosphere of Yoknapatawpha county. I gathered that his idea was that Goodwin and the woman should both be burned as a sole example to that child; the child to be reared and taught the English language for the sole end of being taught that it was begot in sin by two people who suffered by fire for having begot it. (128)

この牧師は、グレアムが「殺人犯というだけではなく姦淫の罪人」であり、「ヨクナパトーフア郡の自由で民主・プロテスタント的雰囲気汚す者」だとして「グッドウィンとその女を焼き殺すべきだ」(128)と説いている。この牧師が宗教的見地から非難するのは、殺害というよりもむしろグッドウィンとルビーの内縁関係であり、説教を聞く会衆に対してグレアムと同じく火あぶりによる制裁を促している。グレアムと牧師の発言の一致からもわかるように、ヨクナパトーフアの法廷は、その外側の世界の映し鏡になっているため、客観的真相を明らかにするための法的な枠組みが消失しつつある。

「娼婦」さながらの服装で法廷に現れるテンブルは、トミー殺害に関する目撃者として証言台に立つが、血の付いた玉蜀黍の穂軸を見せられ、彼女自身の被害状況について証言を求められる。「誰も君を傷つけはしないよ」と言うグレアムは、陪審席にいる男性を指して、「父や夫であるこの善良な男性の方々にあなたが言うべきことをお聞かせして、あなたが受けた悪事を正してもらいましょう」(284)と述べる。穂軸を掲げて尋問をする地方検事に対して、テンブルは、「オウムのような受け答えをして」(286)、ポパイに襲われる瞬間と全く同じように「膝の上に置いた掌を上にして」(284)服従のしぐさを示し、事件について偽証をする。「私は被害者である無力なこの子供をこれ以上苦しみにさらすわけにはいかない——」(288)というグレアムの発言の途中で、テンブルの父親ドレイク判事と4人の兄弟が迎えに来る。

The District Attorney turned away. “Your Honor and gentlemen, you have listened to this horrible, this unbelievable, story which this young girl has told; you have seen the evidence and heard the doctor’s testimony: I shall no longer subject this ruined, defenseless child to the agony of——” he ceased; the heads turned as one and watched a man come stalking up the aisle toward the Bench. He walked steadily, paced and followed by a slow gaping of the small white faces, a slow hissing of collars. He had neat white hair and a clipped moustache like a bar of hammered silver against his dark skin. His eyes were pouched a little. A small paunch was buttoned snugly into his immaculate linen suit. He carried a panama hat in one hand and a slender black stick in the other. (288)

『サンクチュアリ』では会話文が「——」で途切れるところが多いが、「苦しみ (the agony of)」の後に続く「——」は、「レイプの証言」といった表現で埋めることができるだろう。この空白部分から見えてくるのは、テンブルが証言を求められることで事件のときと同じ「苦しみ (the agony)」

を体験していることである。ロバーツは、テンブルが「法廷でもう一度暴行を受けている」(138)と述べており、デュヴァルもグレアム「地方検事は本質的にテンブルに対する暴行を繰り返している」(70)と指摘している。これらの指摘を踏まえると、この空白は、テンブルを残酷な性暴力の犠牲者として保護するという法的正義の奥に、彼女の身体を支配しようとする「善良な男性」の欲望が潜むことを暗示している。そして、この空白を遮るドレイク判事は、グレアムと聴衆から引き受けたテンブルの身体を父の権威の支配下に置くのである。ドレイク判事は、黒服のポパイとは対照的に「真っ白な麻のスーツ」と「ステッキ」という大農園主のような格好をしているため、「娼婦」さながらに入廷するテンブルの身体は、最終的に旧南部的な「淑女性」に押し込められることがわかる。そして、グレアム検事、聴衆、ドレイク判事は、それぞれ異なった階級の白人たちであるが、法という階級を超えた共通原理のもとで父権的秩序を維持するために結びついている。

この裁判で真犯人ポパイの存在は最後まで明らかにされず、無実を証明できないグッドウィンが身代わりとなって死刑判決を受ける。これは、グッドウィンがポパイの報復を恐れて彼の存在を最後まで隠していたこと、そして、テンブルがおそらくグレアムに教示されて偽証を行ったことによって生じた結果である。しかし、ポパイは自らが犯していない警察官の殺害によってあっけなく処刑されるため、この裁判における法の機能不全は彼の運命にも間接的に影響を及ぼしている。

Ⅲ. 「焚刑」の儀式—処刑場としての「広場」

死刑判決を受けたグッドウィンは、郡庁舎とわずか一枚の壁を隔てて隣接する刑務所に戻るのだが、その周りには、法廷から彼の後を追ってきた「浮浪者や田舎者や不良少年や若者たち」(292)が集まってくる。彼らは独房から出てきたグッドウィンの話に耳を傾け、夜が更けると彼に危害を加えることなく立ち去っていく。夜遅くにホテルの前に座っている旅回りのセールスマンたちは、グッドウィンに何もしない住民たちを不思議に思い、「連中はあの男をそのまま放っておくつもりのようなだな」、「玉蜀黍の穂軸が使われたんだろ。ここの連中は一体どんな奴らなんだよ。連中を怒らせるには何をしたらいいのかよ」(294)と言う。彼らの言葉は、共同体の外側の視点からグッドウィンへの制裁を扇動するものであり、グレアム検事の発言を非公式で乱暴な表現で言い換えたものである。つまり、セールスマンとグレアムは、本来立ち入るべきではないジェファソン内の倫理的領域に踏み込もうとしており、このような領域侵害とそれに伴う領域内の秩序崩壊は、『サンクチュアリ』の作品全体に見られるパターンである。

The drummers sat a little while longer along the curb before the hotel, Horace among them; the south-bound train ran at one o'clock. "They're going to let him get away with it, are they?" a drummer said. "With that corn cob? What kind of folks have you got here? What does it take to make you folks mad?"

"He wouldn't a never got to trial, in my town," a second said.

"To jail, even," a third said. "Who was she?"

"College girl. Good looker. Didn't you see her?"

"I saw her. She was some baby. Jeez. I wouldn't have used no cob." (294)

さらにセールスマンのひとは、「俺だったら穂軸なんか使わなかったのに」(294)と言い、テンプルに対する暴行の事実よりもその方法を問題視している。一種のダーティ・ジョークとも思われるこの言葉は、若い娘を別の男性に奪われたという女性に対する所有意識を暗示し、テンプルを「娼婦」的な世界から救い出して大農園主の娘へと回復させようとする法廷の男性たちの支配意識と根本では結びついている。また、「彼女はベイビーだったのに」(294)という表現は、法廷においてグレアムが使う表現、「被害者である無力なこの子供」(288)と同様に、女性が男性によって守られるべき「無力な」存在だとみなすものである。このように、郡庁舎内の法廷が、南部男性の建前が語られ、実践される場所であるとすれば、そこに隣接する広場は、隠された本音が出出す場所であるという表裏一体の関係をなしているのである。

郡庁舎とその前の広場がともに危険を与える場所だとすれば、グッドウィンにとっては、刑務所の内部こそが安全が保障された唯一の場所である。裁判前のグッドウィンは、ホレスから「君には法律と正義と市民権があるのだよ」と言って慰められるが、「確かに。もし俺が残りの人生をこの独房の隅に座って過ごすんだったらな」(132)と反論し、刑務所の外に潜む危険を感じている。

“You’ve got the law, justice, civilization.”

“Sure, if I spend the rest of my life squatting in that corner yonder. Come here.” He led Horace to the window. “There are five windows in that hotel yonder that look into this one. And I’ve seen him light matches with a pistol at twenty feet. Why, damn it all, I’d never get back here from the courtroom the day I testified that.” (132)

逮捕直後のグッドウィンが刑務所の外に恐怖心を抱くのは、ポパイによる狙撃の可能性を踏まえたものだが、実際の脅威は、メンフィスの闇社会に通じるギャングのポパイではなく、広場に集う一般市民のほうである。このように、『サンクチュアリ』では、法的な管理・制裁の場所であるはずの刑務所が安全を与え、法廷が法の下での正義を保障せず、広場が処刑の場所であるという司法のねじれが生じている。

郡庁舎前広場でグッドウィンが群衆の暴力にさらされるのは、まさに死刑判決が下された日の真夜中である。去勢されたグッドウィンは、グレアム検事の言葉通りに、「ロケット花火のような光炎を放つ5ガロンの石油缶を背負わされて」、「穏やかな空隙の中から静かに轟く」(296)炎の中に消えていく。

Horace ran. Ahead of him he saw other figures running, turning into the alley beside the jail; then he heard the sound, of the fire; the furious sound of gasoline. He turned into the alley. He could see the blaze, in the center of a vacant lot where on market days wagons were tethered. Against the flames black figures showed, antic; he could hear panting shouts; through a fleeting gap he saw a man turn and run, a mass of flames, still carrying a five-gallon coal oil can which exploded with a rocket-like glare while he carried it, running. (295-96)

この「焚刑」を首謀するのは「黒い人影 (black figures)」であるが、彼らがどのような人物たちなの

かについて詳細は明らかではない。しかし、炎が立ちのぼる場所は、「市場の日には馬車がつながれる空地の中心」(296)であり、週末の日中には「ゆったりとした流れ」(112)で人々が行き交う地点である。つまり、広場という同じ空間が昼と夜で異なる側面を見せるように、穏やかなジェファソンの町とその周辺住民たちの中には、残忍なまでの暴力性という影が潜んでいるのである。

また、グッドウィンに対する制裁は、白人が黒人を暴力の標的にする場合が多い南部の現実とは異なるものである。歴史的な共通認識として、南部におけるリンチは、非力な白人女性を黒人男性の脅威から守るという大義名分に付随して、大農園文化に起因する白人優越主義の維持と経済状況の変化に対する白人たちの不安や不満の解消という側面があった(Brundage 1-20)。また、歴史家ドン・H・ドイル(Don H. Doyle)の調査によると、ミシシッピ州ラフェイエット郡で1865年から1935年の間に新聞報道された10件のリンチのうち、1名を除くすべての被害者は黒人男性であり、リンチの目的は、白人女性に対するレイプや殺人を犯した黒人男性に対する報復といったものがほとんどであった(322)。報道に漏れた事件があった可能性は高いが、ドイルの調査は、南部におけるリンチが白人優越主義を維持するための自衛手段として機能していたという一般的な認識を反映している。そして、1908年9月にフォークナーの身近で起きたというネルス・パットンのリンチは、酒の密造を行っていたパットンが白人女性に危害を加えたことに対する白人たちの報復行為であった(Williamson 157-61)。「乾燥の九月」(1931)や『八月の光』で描かれるリンチは、その類似性から考えてもパットンの事件をもとにしている可能性は極めて高いが、『サンクチュアリ』の場合は、この事件との類似性が明らかに認められるにもかかわらず、人種的要素をあえて排除し、白人内部の問題に書き換えているのである。

この書き換えは、テンブルを襲う人物が黒人ではなく白人男性のポパイだという設定とも深く結びついている。彼が白人でありながら「黒い(black)」という言葉で繰り返し表現されるのは、白人女性を襲う黒人男性という南部のステレオタイプが書き換えられた可能性を示すものである。これによって明らかになるのは、大農園文化に基づく父権的秩序を揺るがす脅威は、黒人男性の存在というよりもむしろ、都市の腐敗や産業化をヨクナパトーフア郡に持ち込むような別の白人の存在だという点である。このように、しばしば人種と結びつくレイプとリンチを白人間に潜む葛藤のメタファーにすることによって、フォークナーは近代化へ向かう南部の混沌とした状況をとらえている。

むすび

これまで論じてきたように、『サンクチュアリ』は、南部のジェンダー規範が禁酒法下の時代変化によって危機に陥る状況を、白人女性の身体をめぐる言説と重ね合わせて描いている。郡庁舎に集まる異なる階層の白人たちは、この危機的状況に団結して対応し、南部に根付く自警主義によって司法の領域を侵すほどに危険で暴力的な表情を見せる。これによって、共同体の価値基準と一線を画すはずの法廷は、テンブルの事件を通して「神聖な」「女性らしさ」を再認識する空間になっており、この父権的概念を脅かす者は、広場という法の「聖域」の外側で制裁を加えられるのである。

『サンクチュアリ』は、ドレイク判事に伴われたテンブルがパリのリュクサンプール庭園のベンチに腰掛けるという詩的情景で終わる。この「庭園」の場面は、法廷で語られる「神聖な」「女性らしさ」のゆくえを象徴的に示すものである。玉蜀黍の穂軸に屈したテンブルは、法廷を支配する「善良

な男性」に救い出され、父親のもとで無事に保護されたように見える。しかし、酒密造業者に占領されたオールド・フレンチマン屋敷の庭園が「ジャングル」と化しているように、彼女の「女性らしさ」が安定的に守られる「庭園」は南部にはもはやないというアイロニーがこの場面に込められている。

注

ウィリアム・フォークナーの『サンクチュアリ』からの引用はページ数のみを括弧内に示す。また、引用文の和訳はすべて筆者によるものである。

【参考文献】

- Arnold, Edwin T., and Dawn Trouard. *Reading Faulkner: Sanctuary*. Jackson: UP of Mississippi, 1996.
- Atkinson, Ted. *Faulkner and the Great Depression: Aesthetics, Ideology, and Cultural Politics*. Athens: U of Georgia P, 2006.
- Barker, Deborah. "Moonshine and Magnolias: *The Story of Temple Drake* and *The Birth of a Nation*." *Faulkner Journal* 22.1-2 (2006-07): 140-75.
- Blotner, Joseph. *Faulkner: A Biography*. 1 vol. New York: Random House, 1984.
- Brandage, W. Fitzhugh. Introduction. *Under Sentence of Death: Lynching in the South*. By Brandage. Chapel Hill: U of North Carolina P, 1997.
- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha Country*. New Haven: Yale UP, 1963.
- Cash, Wilbur J. *The Mind of the South*. New York: Knopf, 1941.
- Cox, Diane Luce. "A Measure of Innocence: *Sanctuary's* Temple Drake." *Mississippi Quarterly* 39.3 (1986): 301-24.
- Doyle, Don H. *Faulkner's County: The Historical Roots of Yoknapatawpha*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2001.
- Dunleavy, Linda. "Sanctuary, Sexual Difference, and the Problem of Rape." *Studies in American Fiction* 24.2 (1996): 171-91.
- Duvall, John N. *Faulkner's Marginal Couple: Invisible, Outlaw, and Unspeakable Communities*. Austin: U of Texas P, 1990.
- Faulkner, William. 1931. *Sanctuary: The Corrected Text*. New York: Vintage, 1993.
- . *Sanctuary: The Original Text*. New York: Random House, 1981.
- Guttman, Sondra. "Who's Afraid of the Corncob Man?: Masculinity, Race, and Labor in the Preface to *Sanctuary*." *Faulkner Journal* 15.1-2 (1999-2000): 15-34.
- Hanley, Lawrence F. "Popular Culture in Crisis: King Kong Meets Edmund Wilson." *Radical Revisions: Rereading Thirties Culture*. Ed. Bill Mullen and Sherry Lee Linkon. Urbana: U of Illinois P, 1996. 242-63.
- Irwin, John T. "Horace Benbow and the Myth of Narcissa." *American Literature* 64.3 (1992): 543-66.
- Jones, Anne Goodwyn. "Like a Virgin: Faulkner, Sexual Cultures and the Romance of Resistance." *Faulkner in Cultural Context: Faulkner and Yoknapatawpha, 1995*. Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J. Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1997. 39-74.
- Lahey, Michael. "The Complex Art of Justice: Lawyers and Lawmakers as Faulkner's Dubious Artist-Figures." *Faulkner and the Artist: Faulkner and Yoknapatawpha, 1993*. Ed. Donald M. Kartiganer and Ann J.

- Abadie. Jackson: UP of Mississippi, 1996.
- Langford, Gerald. *Faulkner's Revision of Sanctuary: A Collation of the Unrevised Galleys and the Published Book*. Austin: U of Texas P, 1972.
- Lurie, Peter. *Vision's Immanence: Faulkner, Film, and the Popular Imagination*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 2004.
- Matthews, John T. "The Elliptical Nature of *Sanctuary*." *Novel: A Forum on Fiction* 17.3 (1984): 246-65.
- Meriwether, James B. *William Faulkner: Essays, Speeches & Public Letters*. Updated ed. New York: Modern Library, 2004.
- Millgate, Michael. "Undue Process: William Faulkner's *Sanctuary*." *Rough Justice: Essays on Crime in Literature*. Ed. Martin L. Friedland. Toronto: U of Toronto P, 1991. 157-69.
- Patterson, Laura S. "Ellipsis, Ritual, and 'Real Time': Rethinking the Rape Complex in Southern Novels." *Mississippi Quarterly* 54.1 (2000-01): 37-58.
- Polk, Noel. *Children of the Dark House: Text and Context in Faulkner*. Jackson: UP of Mississippi, 1996.
- Polk, Noel, and Neil R. McMillen. "Faulkner on Lynching." *Faulkner Journal* 8.1 (1992): 3-14.
- Railey, Kevin. *Natural Aristocracy: History, Ideology, and the Production of William Faulkner*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1999.
- Roberts, Diane. *Faulkner and Southern Womanhood*. Athens: U of Georgia P, 1994.
- Strong, Amy Lovell. "Machines and Machinations: Controlling Desires in Faulkner's *Sanctuary*." *Faulkner Journal* 9.1-2 (1993-94): 69-82.
- Tanner, Laura. "Reading Rape: *Sanctuary* and *The Women of Brewster Place*." *American Literature* 62.4 (1990): 559-82.
- Watson, Jay. *Forensic Fictions: The Lawyer Figure in Faulkner*. Athens: U of Georgia P, 1993.
- Williamson, Joel. *William Faulkner and Southern History*. Oxford: Oxford UP, 1993.